



TITLE:

<批評・紹介>古代支那研究 小島
祐馬著

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

CITATION:

内藤, 戊申. <批評・紹介>古代支那研究 小島祐馬著. 東洋史研究 1943,
8(4): 265-267

ISSUE DATE:

1943-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145796>

RIGHT:

批評・紹介

古代支那研究

小島 祐 馬 著

昭和十八年三月一日 弘 文 堂

A5 版本文三五三頁 定價參圓六拾錢

小島博士の著作に就いては私は從來殆んど讀んだことがなかった。わづかに先生の大學に於ける最後の講義「清代の今文學」を拜聴したに過ぎぬ。従つて博士の學問に關して識る所極めて淺く況してその學問は東洋史專攻者には甚だ苦手である所の思想史である。而も木村英一氏の言によれば發表された諸論文は博士の學問の一端に過ぎないといふ。本書だけを通じて博士の學問を一氣に呑み込もうとした私の苦痛は蓋し並大抵ではなかつたことを先づ告白させて頂きたい。

人の著作を讀む場合に私は大抵不知不識の間にその著を通じてその人の生活態度を吟味しようとしてゐる。その次にはその人の理想とする所をその著から汲み取らうとする。そして期待が外れた場合には止むを得ずその文章に表はされた事だけで満足することにしてゐる。小島博士の場合私は數日の苦吟の後徒に自分の器の小なるを嘆ずるのみで遂に的確な觀念に到達し得なかつた。分つたのは唯無暗と手應へがありさうだといふことだけである。

幸、私は木村英一氏の「小島博士とその學問」(東亞人文學報第一卷第四號)を讀んで博士の學問の輪廓だけは分つた。又雜誌支那學第十卷特別號を見て博士の學問の後進への影響の一端を窺ひ得た。平岡武夫氏や重澤俊郎氏の論文が本書に收められてゐる「分野説と古代支那人の信仰」「原商」の發展であることは既に小川茂樹氏(本誌七卷四號)や鎌田重雄氏(歴史學研究第百十一號)が指摘して居られる。これによつて京大系支那學者の中で支那古代史の研究は主として支那哲學專攻の人々によつて續けられてゐることも分る。

擬本書に收められた八篇を概観するに著者自身もいはれる如く一見全體として體系ある叙述にはなつてゐない。然らばどういふ標準で博士の全著作五十篇以上の中からこの八篇が選ばれたのだらうか。釋富一篇を除けば昭和六年以後のものばかりで且残りの七篇の内五篇までは昭和十一年以降の近作である。博士の著作年表を見るとその論文の大半は後期の數篇の中に含まれて了ふ様に見える。例へば「支那經濟の出發點」「墨子の經濟思想」「譚嗣同の仁學」「黃宗羲の政治經濟思想」「司馬遷の自由放任説」等々の十數篇は盡く「支那古代の社會經濟思想」の一箇の中に含まれてゐる。又「支那に於ける刑罰の起源に就いて」にしてもそれに先つて「尙書に見えたる五刑」や「經濟より觀たる尙書の贖刑」の諸篇があり、結局本書所收の諸篇は大抵博士の諸論文の集大成である様に思はれる。上の二篇以外の七篇は著作年表ではそれに先行する類似の論文が見當らないが「分

野説と古代支那人の信仰」は昭和七年より十一年に至る特殊講義「古代支那人の信仰」「五行說研究」等に於て準備されてゐたものと思はれるし「支那古代の祭祀と禮樂」にしても一朝に成つたものとは思はれない。この様に見て來ると博士の學問はその時々興味に驅られて手當り次第テーマを拾ひ上げては文献を漁り歩く態のものとは大に異り常に一定の關心の方向があつて後年に至りそれ等が自ら凝結大成したものと推測出来るのである。更に又博士自身に於て十分準備の暇がなかつた様な後年の創見に就いてはその弟子達がそれを進展させたものと思はれる。「原商」の一篇を重澤氏が發展させた如きその例であらう。いひ換へれば博士の學問學統そのものが高度に體系的である爲に特に一著書に於て表面上の體系をつくるふ必要がなかつたのだとさへ考へられる。

又本書を通讀して感ずることは、博士は何等かの創意なきものは發表の意義がないといふ方針を堅持して居られるらしいことである。従て本書の諸篇は各々何等かの意味で人の心を打つものがある。

「支那古代の祭祀と禮樂」に於ては一方では甲骨文金文の最新智識を利用し、他方グラネ等の民族學的方法をも取り入れながら而も斷片的な思ひつきに墮することなく、祭祀に關するあらゆる智識を一應秩序づけた後、祭と政治の關係を規定し、更に「祭祀と禮樂」の一章を附け加へて禮は祭の形式であること、而して禮は單なる儀禮に非ず社會に對する規範力を持つものである

り、後世大典や會典の如き法典と化する素質を持つものであつたことを指摘された。本書にこの禮樂の一章を附加しないとどうも納まりが悪いと感ぜられた所に正に博士の眞面目がある。

西洋の法律學の發達の考へ方だけでは支那のそれを説明出来ないこと、延いては法律そのものの觀念を支那の法律を觀ることによつて更改しなければならぬのではないかといふ大問題を提出されたのが「支那に於ける刑罰の起源に就て」の一篇である。これこそ私がかねて考へて居た歴史學者の最も重要な役目の一つであり、物事の起源や沿革を調べることの最高の意義は正にこゝにありといふも過言ではないと思ふ。

一見餘りにも複雑で秩序のつけ様もないと思はれる支那の社會事象をものゝ見事に歴史的に體系づけて了はれた博士の體系づけの技倆の程は「分野説と古代支那人の信仰」の一篇にもよく表はれてゐる。「帝は本來始祖又は遠祖の意味に用ひられ従つて帝の崇拜は祖先の崇拜であつたのであるが、後に至りそれが星の崇拜に結び付き、更に星の懸つてゐる天の崇拜に移行したものであると思ふ」これが博士の結論である。この一文によつて博士は古代支那に於ける政治思想と社會經濟思想以外の諸説諸信仰を一舉にして體系づけられた。

「原商」に至つては博士の創意の中でも一際鮮かな一篇であり、あの思ひつきの名人である王國維や郭沫若もさすがにこゝには思ひ到らなかつた所のものである。博士より二年程前に傅斯年が「周東封與殷遺民」なる論文を發表してゐることは小川

氏も指摘して居られ、殷の遺民の役割を強調したのは必ずしも博士ばかりではないが、併しその證明の方法に至つては全然別のものであり、商の字が古くは國名にしか用ひられなかつたと及びこの字のみがその他の經濟的意味を持つ文字と異り、且に従はないことを以て、商賈の商は即ち殷の遺民の稱なりとするのである。

「支那文字の訓詁に於ける矛盾の統一」も博士の卓抜な創見の一つである。

「支那の學問の固定性と漢代以後の社會」では、漢の武帝が諸思想を排して儒學に統一したのは學者の輿論を封する爲の手段であり、武帝は支那の學問を飼ひ殺しにした張本人だといふ通説をはなれて、むしろ當時の社會狀態、特に經濟狀態が然らしめたもので、當時の士人階級がむしろ之を欲したのであること、漢以後の學問の固定は即ち支那の社會の固定によるものであることを指摘される。飽くまでも社會經濟と結びつけようとする。博士の一流の考へ方である。

博士の考へによれば支那の思想史は徹頭徹尾社會思想の發達の歴史である。道德法律經濟政治等を含む廣義の社會現象に關する思想のみが支那では發達したとするのである。これは本書を通じて明確に「貫せる考へ方である。この考へ方に従つて「支那古代の社會經濟思想」の長篇は集大成されてゐる。而も支那に於ては古代のみならず清朝に至る迄この風潮は一貫して居るとして清朝の學者の社會改良説をも一々擧げて居られる所に

博士の周到な用意がある。木村英一氏もいはれる如くこの一篇は「先生の今迄發表されたものの中で最も高いもの」だと私も思はれる。

武内義雄博士の「支那思想史」(岩波全書)には公平に見て到底小島博士の如き確固たる信念はない様に見受けられる。武内博士の立場を臆測するに、博士の思想史は支那人の精神生活の歴史である。文學とは種類こそ異なれ凡そ人間の精神生活を豊かにするものが思想である。従て博士では曾て支那人の頭を賑はした所のものは何でも取り入れられる。佛教思想及びその影響が中世近世に於て重んぜられる所以である。同じく京都帝大系のこの二人の碩學の思想觀を對照して見るのは誠に興味深いものがある。(内藤戊申)

シベリア諸民族のシャーマン教

ニオラツツエ原著
牧野弘 一譯

B 6 版一七〇頁 昭和十八年四月
生活社發行 定價貳圓五拾錢

本書の著者はボーランド人であり、原題名は "Shamanismus bei den sibirischen Völkern" といひ一九二五年の刊行になる。今回牧野弘一氏による邦譯が、公刊されたが、その内容は「シャーマン教的世界觀」「シャーマン」の二章に大別される。「シャーマン教的世界觀」の章は